

七x 467

162
1445

高野山道志百箇全



女人堂舊跡之圖

酒 成 名 曰



敬

西

上

性

因

者

人

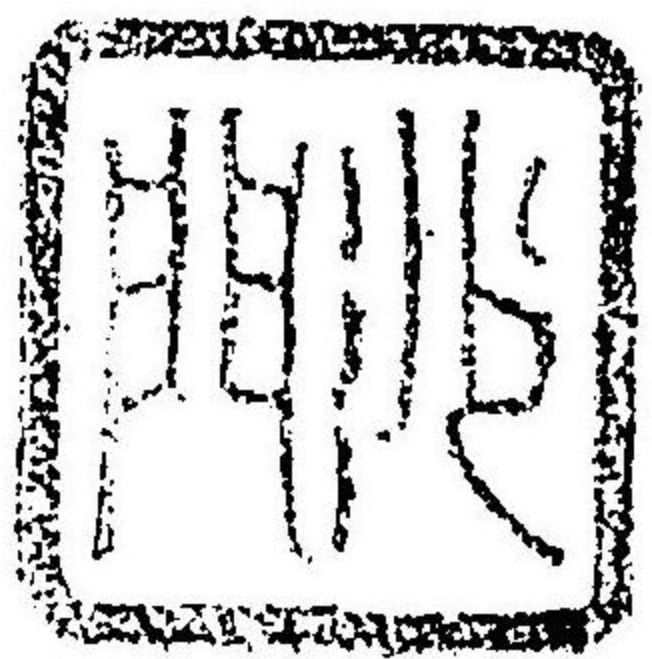
性

子

家

高野山道土了る角の叙

高野山道土了る角の叙



高野山道土了る角の叙

高野山道土了る角の叙

高野山道土了る角の叙

高野山道土了る角の叙

高野山道土了る角の叙

揚安一冊子とありて
余福の道初る處に借す
これ不動阪とありて
是奥院兼以稱く大門
了明道の教然るに
是

古今獨歩の珍書本
請上之本校ぬる
福の便後方案由子
四治廿五年

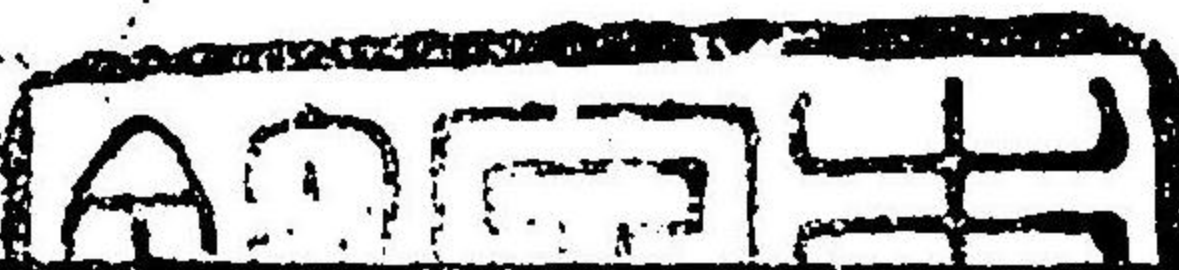
編者誌

高野山道とるへ

目録

- 参詣のすゝめ
- 高野山は上品蓮臺の淨土なる事
- 祈親上人感靈夢圖
- 四寸岩の事
- 不動阪の事
- 女人堂舊跡の事
- 参詣人取調所の事
- 所縁坊の事
- 寄留店の事

- 金剛峰寺の事
- 六時の鐘の事
- 大學林の事
- 壇上の事 (東塔、三昧堂、大會堂、瑜祇塔、愛染堂、大塔、金堂)
- 修正會の事
- 彼岸會の事
- 結縁灌頂の事
- 結縁灌頂庭儀之圖
- 不斷經の事
- 楸の辨天遙拜所の事
- 灌頂堂の事



高野山道とるべ

南紀 山口小五郎編纂

参詣のすゝめ

後宇多法皇は正和二年七月高野山に御参詣の節慈尊院上
 宮大夫御信卿は御前にかしこまりて御興に召され玉へと
 奏するに法皇の曰く
 卿知らむや此山は法爾として金胎曼茶羅の峯なること
 をされば政所より大塔に至るまでの百八十基の卒都婆
 は胎藏曼茶羅の百八十尊を顯せり大塔より奥院に至る
 までの三十七基の卒都婆は金剛曼茶羅の三十七尊を顯
 せり仍て一度のぼる者は本有の無盡莊嚴を開發して直

○三鈷松の事

○御影堂の事

○准胝堂の事

○大塔本尊假堂の事

○西塔の事

○御社の事

○山王院の事

○孔雀堂の事

○一切經藏の事

○杓子の芝の事

○大塔の鐘の事

○勸學院の事

目錄二

奥院之部

- 一の橋
- 多田滿仲公の石碑
- 蛇柳
- 明智光秀の碑
- 中の橋
- 棺かけ櫻
- 汗かき地蔵
- 姿見の井
- 一番石碑
- 芭蕉塚
- 圓光大師の碑
- 御供所
- 水手向所
- 玉川
- 御廟の橋
- 彌勒石
- 御陵
- 籠燈堂
- 骨堂
- 奥院の御廟
- 贈官諡號の事
- 三寶鳥の事
- 觀賢僧正奉剃大師定中之御髮圖
- 大門口下り道の事
- (大門、鏡石、押上岩、袈裟掛石、捻石、天野神社、慈尊院)

に曼茶の聖衆となること高祖大師の記文に見へたり我
れ年來の發願當山參詣の事のみ願ふに過去の戒行によ
りて儻々帝王の身を受くと雖も若し今生にかゝる靈地
を踏まざれば當來いかでか覺王の花臺に登らん夫れ參
詣の心得は穢土より淨土に赴くの意なり念々に十惡の
罪垢を淨め歩々に入葉の心蓮を開く然ればたとひ山間
に數日を重ね巖頭に身骨を碎くとも何ぞ興に乗らんや
とて御衣の裾を泥土に汚かしつゝ、御登山ありけるとな
ん帝王すら斯の如し况んや皇國否世界有信の諸人も
どもに袂を連ねて參詣せざるべけんや
若人專念三遍照尊一一度參詣高野山 無始罪障道中滅
隨願即得諸佛土

うねりなき蓮の臺の高野山登れ人々登れ人々前座主快猛
高野山は上品蓮臺の淨土なる事
夫れ高野山の形は八葉の蓮花に似たる故に古より八葉峯
と申すなり爰に一の話あり延喜年中の頃大和國に祈親上
人と云ふ人あり幼稚にして父母にをくれ出家して興福寺
に住す常に法花經を讀誦して父母の追福に擬せられけり
あるとき初瀬寺に籠りて親の生處を示し玉へと祈られけ
る夢に觀世音告玉ひけるは是より西南に常て淨刹あり高
野山と名く汝彼山に登らば自ら父母の生處を知べしとて
西南の方を指さし玉ふに指のはしより大光明を放て光の
中に高野山の山川諸伽藍等悉くあらはれたり上人夢さめ
て大に悦び翌日常山にのぼり大師に祈ること初瀬寺の如

親上人感靈夢圖



し一日大塔に在て眼を開くに山中忽に兜卒の内院彌勒の
 浄土となる然も庭上に二の蓮花あり上人の父母端嚴微妙
 の菩薩となりて彼の蓮臺に坐せり又側に未だ開かざる蓮
 花あり時に人ありて上人に示して曰く汝將來に必老爰に
 來て此蓮花に坐すべしと云畢て浄土の莊嚴即ち隠れぬ上
 人深く大師の加持力を感喜し當山即浄土なることを信じ
 て直に此山に留りて修行し玉ふ古人は日本の靈場を九品
 浄土に配當して當山を以て上品上生の蓮臺と定め玉ふ其
 とに由あり尋ふべし高野山嗚呼仰ぐべし八葉峯
 大坂街道より登り口
 四寸岩の事
 神谷宿を距ること十餘町ばかり行きぬれば四寸岩あり岩

の間は一雙の足跡ありて千萬の参詣人は總てその足跡を踏み登るなり古老の傳に昔し弘法大師踏み凹められたる御足跡なりと稱す印度の靈鷲山には佛足跡を留めて利益を施し日本の高野には大師の足跡を留めて一踏聖跡の縁あり佛祖の善巧其軌一なりこの四寸岩は生々世々の父母兄弟が踏みにし跡なれば自ら懐舊の情を生じ追遠の志を起す所なり方今は四寸岩の上側に牛馬道を開きて通行するを以て無案内の参詣人は往々四寸岩を踏ませして通過するあり請ふ御注意あれ

不動阪の事

四寸岩を距る五六町の處に極樂橋あり橋下には玉の如き清流は滾々として琴筑の響を奏せり橋を渡れば右側の石

地藏の前に骨石と云ものあり昔し旅人の骸骨を納し所に此石を踏めば餓鬼に崇らる、と云ふ用心あるべし、その骨石より不動阪なり四十八まがりの峻阪にして人々玉の汗を流し杖の力を借りてよぢのぼる

放鶴子

不動阪にて山人の柴をろすを見て

日本名勝詩選に云く

不動阪尤險 下山途更長 岩稜類嘴足 棧渡恐廻腸
石壁垂簾水 溪巖獨木梁 投村斜日沒 拭汗備三行裝

不動阪

雲石堂

峻阪扶筇躋碧崑 羊腸百折鬼巖開 行人胷險目眩轉
健脚踏雲天外來

この阪の中央に二間二尺四方の不動堂あり古來外の不動
と申し傳ふ開基は明ならち中興の施主は備前國上都郡金
岡莊野崎三郎兵衛入道久家なるもの二世安樂の爲に造營
せしとかや此堂明治十四年焼失せしが大阪の信徒上田み
ちと申す善女之を一建立すさて外の不動より六七町行け
ば岩不動とて昔し弘法大師不動の梵字を岩上に爪錨せら
れし所あり岩不動より二三丁行きて遙かに見下せば一條
の素練な、めに翠壁に懸れるあり是れを兒の瀧と云ふ高
野の嚴寒には瀧水凍りて水晶を垂れたる如くにて最も見
事なり

女人堂舊跡之事

不動阪を登り盡せば舊女人堂場所なり抑も高野は女人禁

制の山法なりし故に維新まで參詣の女人は總て此堂に通
夜せしものなり凡そ弘法大師の女人を禁制し玉へるは女
人を濟度せざるの義にあらち全く令法久住の勝計なり佛
戒上には固より女人の僧寺に入るを禁じたり殊に嗟峨天
王弘仁三年四月の勅に云く

比來俗輩男女入僧尼院既講聽屢有侵忤外似勝因内汚淨
業自今禁男入尼寺女赴男寺上

と大師は弘仁七年に高野を開創し玉ふ故に殊更王法の嚴
誠を守りて女人を結界し眞言醍醐の妙教をして遠く龍華
三會の曉に傳へ一切衆生を化度せんが爲なりたどひ生身
の女を禁むるも命終の後は直に大師の加持力を以て自
在に内院に引攝し玉ふなり五障の深き女子たるもの猶ほ

大師の深重なる御慈悲を仰ぐべし况や今日をや彼の女人堂の正面に地藏菩薩の大銅像あり施主は舊江戸元飯田町横山たけ女比翼連理を契りし亭主に死に別れ愁歎の中にはや七七日の佛事もすみ亡夫の白骨を頸にかけ泣々高野山に参詣し女人堂に一泊して地藏尊の靈夢を蒙り一には亡夫菩提の爲め二には女人成佛の爲め三には自身滅罪の爲め一念發起して大阪まで歸りつゝ大阪の觀音院中興元照上人並に江戸の法師言道房へ委託して冶工を大阪西高津の住人相模椽藤原正次と定め彌々地藏尊の大銅像を鑄造して高野山に奉納せしは延享二乙丑五月十有五日なり其後文化二乙丑三月高野の鑄師市郎兵衛藤原榮就修葺し又明和四丁亥の年粉川の鑄匠蜂屋薩摩椽藤原正勝なるも

の重て修葺せられたりと云ふ地藏尊を拜して四五間行けば道の左側に聖觀音の銅像あり

参詣人取調所の事

苅萱の物語には九万九千の御寺々と稱し又塊亭の句には霧となる香のかほりや九百坊と稱する如く山上に寺院櫛比して鐘の響や御經の聲は晝夜たへざる故に初めて登山するものは途方に迷ふ是を以て一山中より入口に取調所を設置して常詣役員を置き参詣人來るときは國所姓名を問ひ諸寺院より差出しつゝある檀縁帳を取調べ先祖以來縁故のある寺院に案内せらる徳義上の案内なりとて別に案内料を要せむ然るに御注意まで一言を申さん釋迦に提婆弘法に守敏と云ふ謬もありますが諸國より一世一度

どか稀れには兩三度參詣の人もありて遙々大師を慕ひ高野を仰ぎて參詣する善男女に對し諸所の道筋に種々の小人等或は里程を偽り宿坊を誹り時刻を欺き荷物を預り其他時宜の風説を造り參詣人を誑かす故に往々その淨説を信じて先祖以來重縁のある所縁坊にも立寄らむ折角寶の山に入りながら空手にして下山し後悔するもの甚多し故に參詣人は彼等の淨説に迷はむ必む此取調所に立寄りて所縁坊に就き玉ふべし

所縁坊の事(又は宿坊とも菩提所とも云)

當山は諸佛の淨土なる故に日本全國上は天子より中は舊諸大名より下は町人百姓に至るまで當山に墳墓を設け位牌を建て各々その菩提所を定め玉ふ故に當山を日本の總

菩提所と稱するなり菩提所乃ち所縁坊に止宿して先祖の位牌を納め中曲理趣三昧或は土砂加持などの御法會を拜むときは妄念の雲晴れ眞如の月澄み六根清淨なりさて人間僅か五十年花に喻へて朝貌の露よりもろき身の上なれば恵みの深き父母に死に別れ又はいと可愛の妻子に離れたるときは我宅にありて空しく泣明し泣暮さんよりは高野の所縁坊に尋ね登り日牌月牌茶牌などを建立して亡者を回向するこそ高野詣での肝要なりその一例を話さば文祿三年に前關白太政大臣豊臣朝臣秀吉公は亡母天瑞寺殿春岩大禪定尼第三回忌の爲に此山に登臨し玉ひ公家には藤原朝臣龍山公等武家には源朝臣内大臣家康公等供奉の式を刷ひ法筵に參拜し玉ふ太閤拈香の歌になき人のかたみの髪を手にあまると涙かな

しも 附言 金剛峯寺七堂伽藍並に奥院みちすがら華族方の
石塔等の案内は所縁坊より各院出入の珠數屋へ兼て申
附ありて詳く案内致さる、なり

寄留店の事
當山には近來寄留店軒を並べて朝夕の烟りも賑ひにける
そが中に最も多きは珠數屋なり諸宗各別の珠數は店の表
に垂れさがりて鮮かなり殊數を購求せば奥院に參詣のと
き弘法大師一代御所持の珠數を以て御開眼を施されける
又經師屋と申して種々の御經類を始め佛書佛繪等を調製
する店あり又は袈裟御衣等を調進する店あり又佛菩薩の
像殊に弘法大師の木像及び位牌を彫刻する大佛師店もあ
り其他諸種の商家は他所の市街に類せり

金剛峯寺之事

小野仁海僧正金剛峯寺建立修行緣起に云く右寺は弘法大
師の御建立にして紀伊國伊都郡の正南に當り丹生大明神
所頂の山地密教相應の所修禪入定の砌なりと即ち金剛峯
寺は高野山の座主寺にして弘法大師の御高弟眞然後僧正
の住職たりしより今に至て三百五十余世に及べり現今山
内寺院及び全國末寺末派を統轄せり中世應其上人のとさ
豊太閤再營せられて青巖寺と號したれども明治初運より
舊號に復して金剛峯寺と稱す境内に鐘樓堂あり護摩堂あ
り眞然堂あり鬱々たる森林その四面を圍み地形高燥にし
て山内第一の名刹なり方今は參詣人の拜覽を許す
附柳の間の事昔かし關白秀次公御切腹の間なり秀次公は

文祿四年己未秋七月十日太閤御所の呵嘖にあひ遁れて當山に登り身を應其上人に托す然るに十五日池田伊豫守福島左衛門福原右馬各々一千騎を卒ひて登山し秀次誅伐の命を下し三千の兵士當寺を圍ひ應其一喝して兵を退け以て秀次公に逼り自害を勸む乃ち秀次公は沐浴身を淨め柳の間にて自殺す介錯人篠部淡路守なり殉死六人あり秀次の墓は光臺院の後にあり法名は祥雲院嚴麟公と號す

六時の鐘の事

金剛峯寺の門前を出で、衝きあたり高く石垣を積み上げて鐘樓の半空に聳へたるを六時の鐘と云ふ元和四年二月六日藝州の福島左衛門太夫正則朝鮮の梵鐘を當山に寄納せしなり寛永七年十月四日焼失して同十二年四月十二

日孝子正利再び鑄造して寄附す晝夜六時に撞き鳴らして時を報るる故に六時の鐘とこそ云へ

大納言光廣

高野山なき身の數に今日もまたもれて聞きぬる入相の鐘

大學林の事

六時の鐘の北面に當て輪奐たる堂舎の見ゆるは大學林なり未頼しき青年僧侶は螢窓雪案に苦學して讀書の聲は松風に交り學寮の燈は衆星に似たり社會の文運に伴ひ佛學の盛大なるは一宗否佛敎の爲に賀すべきなり夫れ學林の制度を開くに中學林九級全科卒業の者は本宗長者より敎師試補の任命を蒙り純粹の密宗僧侶となり一寺住職の資格を有す次に大學林九級全科卒業の者は中僧都に昇級し學生の敎師となり敎學上に實功を奏する者は愈進み愈登

て本宗長者の位を占むるに至る是れを進學生と申すとか

壇上の事(又は七堂伽藍と云)

一 東塔(白河院の御願にして大治二年十一月に建立す御

本尊は御等身の金色なる尊勝佛頂の尊像等なりしが元

治年中焼失して未だ再建に至ら老壇上の入口右側に高

き屋敷あるは東塔の跡なり

一 三味堂 金剛峯寺第十二世の座主濟高僧都の建立也

一 説には嵯峨天皇の御廟堂とも云へり康和三年三月五

日より六口の三味僧を置く故にしか名くとかや本尊は

金界の五佛及び四天王の像なり此堂昔し西行奉行せら

れし故に堂前に西行櫻一株あり又西行の家集に三味堂

の方へ分入りて秋深く鈴の音するを聞て哀れなれば

思ひ来て淺芽が露をわけ入れれば唯わづかなる鈴虫の聲

一 大會堂 又は蓮花定院とも云鳥羽院御菩提の爲に五辻

齋院發願主となり安元三年建立せらる佐藤憲清その奉

行たり本尊は丈六寶冠の阿彌陀佛等なり昔は毎年五月

十一日より五日間宗義釋論の大談義あり檢校兩學頭

及學衆とも百廿人あり故に大會と云ふ鎮守明神の御託

宣にはこの大會には諸神みな影向ありて聽聞し玉ひ先

一 瑜祇塔遙拜 會堂と愛染堂との中間に立て一町向正面

に瑜祇塔あり金剛峯樓閣瑜祇塔と申して大師の御遺囑

により眞然僧正貞觀年中に建立し玉ふ所なり

一 愛染堂 御醍醐天王の御願により永代不斷護摩供修行の御堂なり光明院貞和年中にも重て繪旨を賜り永代の御願たるべきよし宣下し玉へり今に至るまで日々愛染護摩供の修法盛に修行しつゝあり

一大塔 根本大塔と申して高さ十六丈あり南天の鐵塔に擬せしなり八葉峯の中臺に兀立して奥院と慈尊院との中央を鎮す根本の號これに依て起り不二の深旨自ら顯る何となれば本書の初に御宇多法皇の物語を示せし如く慈尊院より大塔までは百八十町の塔婆は胎藏界を表し大塔より奥院まで三十七町の塔婆は金剛界を表す金胎兩部の中心点に高かく聳へたる大塔なる故に兩部不二根本大塔と申すなり高さ十六丈は十六大菩薩を表し

四十九本の楹は四十九院の摩尼殿を表す御本尊は胎藏大日金色の座像長八尺五寸臺四尺五寸後光一丈二尺五寸なり阿闍佛寶生佛阿彌陀佛不空成就佛の四佛は何れも長七尺臺四尺五寸後光一丈二尺五寸なり昔し寛治二年二月白河法皇御幸のとき御夢に大塔の扉を開かせ玉へは其内は廣博嚴洋の世界にして紺殿朱閣軒を連ね金玉の莊嚴てりかいやく誠に初利天の喜見城帝尺の宮殿もかくやと御覽せられて叡信尤も深かりしとぞ弘法大師當山開創のとき大塔の屋敷より長五尺廣一寸八分利相凜々たる寶劔を掘出し玉ひ銘文には釋伽如來說法地迦葉佛成道處とあるより當山は久遠劫の太古より諸佛の淨土なることを發見し玉ひ之を嵯峨天王に奏して寶劔を叡覽に供しければ勅して金銅の筒に納められ本

の如く埋め玉ひしと云

南天経緯至今殘

禪座本源尊像壇

百丈浮圖凌碧落

老身眼錯作雲端

一休和尚詩

造功擬地直磨天

湧現仰觀高塔巖

豈留南山呼万歲

莊嚴國土利無邊

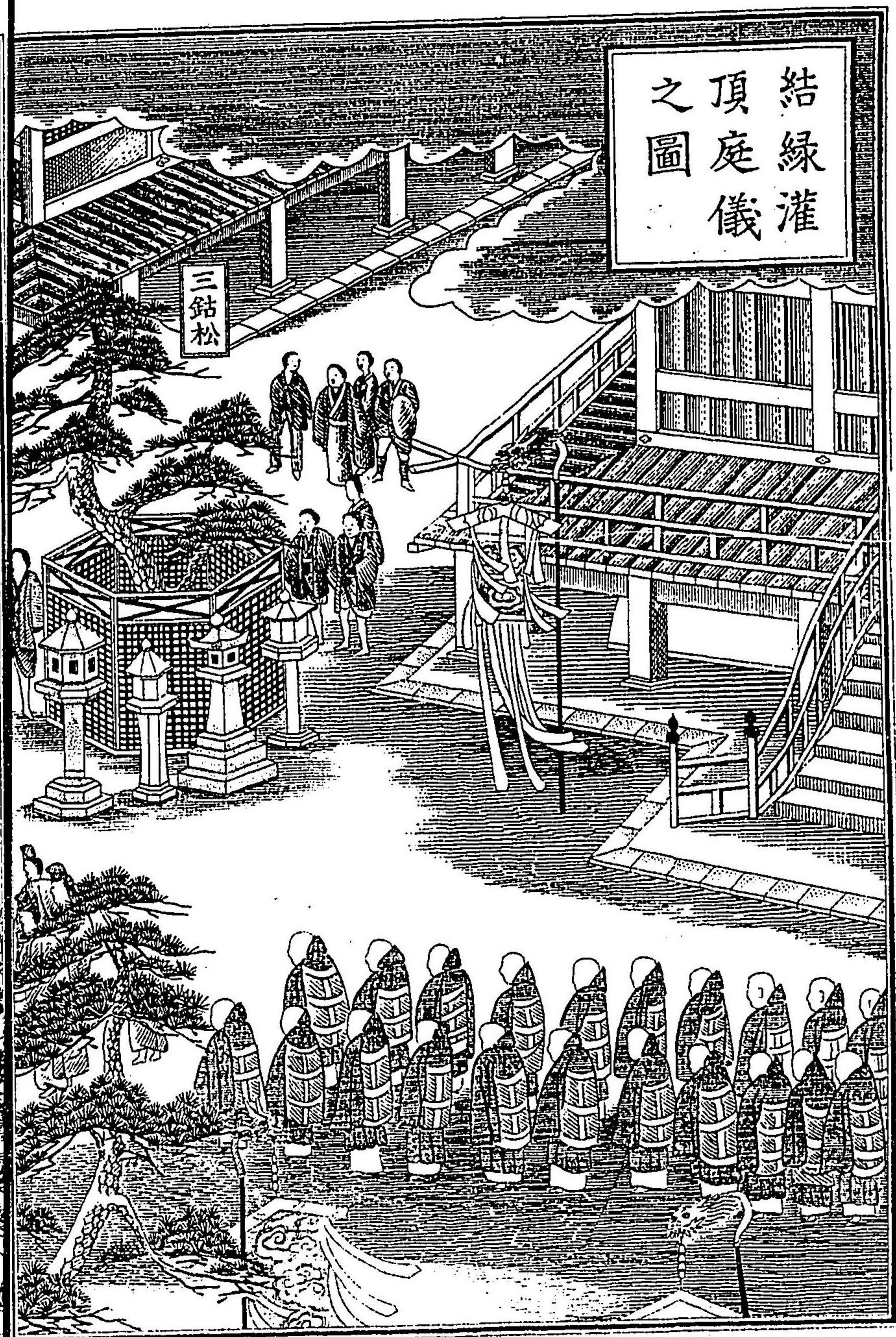
興山應昌詩

さて大塔の興廢を略記せば最初は弘法大師弘仁十年に
 開創し御入定後一百六十年を経て人王六十六代一條院
 正歴五年七月六日雷火に罹りて灰燼となる寛弘三年仁
 海僧正再建の大願を發し嘉保二年白河院再建の院宣を
 下し玉ひ遂に康和五年十一月廿五日落慶式を行ふ次に
 近衛院の久安五年五月十二日雷火の爲に焼失す八ヶ年
 の星霜を経て久壽三年四月廿九日落慶式を行ふの度再

建の節麻細朽損の爲に工匠五十人傭夫四十三人塔上よ
 り轉墜して死す大衆三日間回向讀經す古老傳ふ或人夢
 に墜死者九十三人悉く切利天に往生するを見ると次に
 鳥羽院の保元元年は平清盛修造し次に後鳥羽院建久二
 年に修造し次に後堀河院貞應二年に修造す次に人王百
 五代柏原院の永正十八年二月十二日焼失す(清盛修造後
 三百六十六年也)文祿年中太閤秀吉公登山ありて再建を
 命し修理料貳萬千八百七十石を寄附し玉ふ慶長二年三
 月廿一日落慶式を行ふ次に仁王百十代明正天王の寛永
 七年迅雷の災に罹り焼失す全十九年六月七日再建落成
 す次に天保十二年雷火の爲に焼失す明治十二年に再建
 の許可を経て以來勸奨を始め起工すと雖も未だ功を竣
 ぶる能はむ

一金堂 附法會の事 嵯峨天王の御願にして弘仁七年の
 造立なり四面周匝各七間ありて七七四十九間即ち都卒
 の四十九院を表す本尊は薬師如来丈六の座像なり其他
 に金剛薩埵金剛王菩薩普賢延命虚空藏菩薩不動明王降
 三世明王を安置す皆是れ大師の御作なり先年九鬼隆一
 君と同道したる洋人ウエノロ氏は金堂の品格を評し
 て巴里倫敦等に於ても金堂の如き高雅審美なる建築を
 見せと云へり
 一休和尚の詩に云く
 六時不斷稱名聲 萬嶺松濤洗夢清 衆病悉除藥王力
 山中淨侶自長生 方今は金堂の内覽を許さる、故に參詣人は刮目して拜
 觀否後生善所の結縁すべし

一 修正會の事 毎年正月元日より七日まで金堂に於て之
 を修行す明神の御託宣に修正會は日本第一の祈禱天下
 泰平の修法なる故に大師を始め諸天神も影向し玉ふ
 との玉へり
 一 彼岸會の事 毎年春秋二季の彼岸には満山大衆皆參し
 て彼岸大法會を修行し有縁無縁三界萬靈の離苦得樂を
 祈る事なり
 一 結縁灌頂の事 毎年舊三月廿六日より三日間金堂に於
 て結縁灌頂を修行す抑も密宗の灌頂と申すは三世の諸
 佛成道の儀式一切衆生成佛の印璽なり故に華嚴經には
 之を皇太子即位の大禮に喩る玉ふ何なれば太子は國王
 の具体なれ共即位の禮を行ざれば國王と成ざる如く一



結綠灌之庭儀圖

三钻松

切衆生も然り本有の薩埵なれども灌頂を受ざれば佛と
 ならせ思へば密宗に於て灌頂はどあり難き者はなした
 とひ十悪五逆の男女誹謗正法一闍提の罪人なりとも一
 たび灌頂壇に入るときは大日如来の眞實本願力によるが
 故に無始以來の悪業重罪も忽に消滅して二度と三途入
 難の悪道に生ざる事なく心に隨て十方の淨土に往生す
 べし况んや淨信決定の人なるは即坐に大光明を放て佛
 身を現せし豈に辱らむや經には若し生身の佛を拜せ
 んと欲せば灌頂に入し男女を拜べし是生身の佛なるが
 故と信せし噫十方の信者よ毎年舊三月廿六日より三
 日間を期して先後を競ひ登山し結緣灌頂の壇に入べし
 一不斷經の事 毎年七月七日より一七日の間金堂に於て
 晝夜不斷に中曲理趣三昧を行ふ抑も不斷經修行の本意

は上帝王より下四民に至るまで當山に日月茶牌を建て
 骨爪齒を納められ各寺院に於て藏經回向懇なれども猶
 その闕漏あらん事を恐れて別に不斷經の追福を修す豈
 夜幾百人の大衆行道して經の聲たへせ古今未曾有の大
 法會なり天衆地類も影向し神祇冥道も感應し玉らん不
 斷經の起源は嘉保元年七月七日寺務檢校明算和尚發願
 ありて中院の大堂にて修せられしを始めとす其時に都
 卒天より空智空圓と申す聖僧二人來向しての曰く和尚
 所修の理趣の妙音は都率天に響て教主彌勒尊を始め奉
 り内院別院の聖衆悉く隨喜し玉ひ吾等に命して法會を
 助けむ今より毎年來るべしとて去りぬ爾來今日にても
 深信の者は不斷經中ま、聖僧の影向を感見す今猶を法
 席上に二人の席を除くは其例なりと聞く

一 嶽の辨天遙拜所 大塔金塔の乾隅に方て巍然たる一峯
 の雲間に聳ゆるあり是れを嶽の辨天と申す普し大師開
 山のとき寺院繁昌佛法相續を祈り末代門弟の衣食住を
 して豊饒ならしめんが爲に乾嶽に辨財天女を勸請まし
 まし寶珠水玉などを埋めて末弟子の福田となし玉ふ
 乾岳殘月
 風外一峯咫尺天一
 百嶺重々繞三四邊
 突出乾峯侵碧天
 眼界無涯光景邊
 灌頂堂 大御室 性信親王の御願にて春秋二季結縁灌頂
 の修行所なりしか先年焼けて未だ再建に至らむ
 一 三銘松 弘法大師桓武天皇の延曆廿三年五月入唐學法
 雲端殘月古祠前 精神寂寞境幽絕
 雲石堂 孤林掛月社頭前 逍遙乘興翠微際

し玉ひ大唐の元和元年彼地御發足の砌明州の濱に於て
 誓ての玉はく我れ日本に歸らば大藍伽を建立して秘密
 の法を安置すべしこの杵先往きて眞言相應の靈地に留
 るべしとて三銘を空中に擲玉へば鳥の如くに紫雲九な
 びき東天に飛入りにける即ち御歸朝の後之を尋ねて狩
 場明神の指南により遂に當山に登り玉ふに飛行の三銘
 は松梢にかかりて光明を放てり大師歎んで掌を開くに
 三銘自ら歸ると云三銘の松を詠じたる詩歌甚だ多し
 生因已然至都率 手裡金剛飛放光 瑞氣猶殘野山寺
 一 株松 松籟響扶桑 一休和尚
 千年清操聳雲衢 三銘松蟠其勢殊 枝上徘徊深夜月
 老龍吐出一團珠 澤庵和尚

君か代の久しかるべきためしには兼てぞ植へし住吉の松 住吉明神
これそこのもろこし舟に法を得て去るしを殘す松の一本 阿一上人
三結の松は應仁元年と元祿十三年と植繼きたる故
に現今の松は第三轉の松なり

今はその待曉も近からんちとせふる木もはへかはりけり 内大臣實隆公

ときはなる御法の種を移しゑてその曉をまつ言の葉 寶性院成雄

古の法の榮へをまどふとて今もうゑつぐ一本の松 圓珠庵契冲

一御影堂、此堂は眞如親王御直筆の弘法大師尊影をかけ
奉る故に御影堂と云ふ毎年舊三月廿一日御影供と申し
て大法會を修行せらる御導師は一山の席老即ち法印職
にして御輿に召され職衆に圍まれて上堂す數多の參詣
人は雲霞の如く御影堂の四面に立錐の餘地なし抑も此

堂は檜尾の僧都實惠建立し大師御在世の持佛堂にてあ
りし扱て正歴五年大塔金堂等雷火の災ありしとき此堂
の良隅に異相の童子顯れ袖を以て炎を拂ふと見へしが
遂に火炎をまぬがる又も久安五年の火災にも神風起て
猛火を吹返し此堂は無難なりしと云實に不思議と云ふ
べし

- 一 准胝堂 小松天皇の御願にして御本尊は準胝佛母なり
- 此堂も先年類焼に罹りしが明治十六年の頃堺の河盛仁
平氏之を一建立せられたり特信の成績感慕すべし
- 一 大落本尊の假堂 前の大落の部に記せし御本尊五智如
來の金色座像五体を此所に假堂を設けて安置し奉れり
- 一 西塔 九丈の寶塔あり金界の五佛を安置す大師の御造

囑に依り第二世眞然僧正光孝天王に奏せられその御願
 として建立し玉ふ其後數百年を経て鳥羽院御幸のとき
 再營し玉ひける
 一御社 丹生高野氣比嚴島の四社明神にして當山の鎮守
 なり昔し弘法大師始めて高野山を尋ね玉ふとき大和國
 宇智郡にて一人の狩人に逢ひ玉ふ長八尺ばかり面に赤
 き髭あり身に青衣を着し手に弓箭を携へ黑白の二犬を
 率て道の側に立てり大師何人ぞと問玉へは南山の狩人
 なりと答ふ大師の云く我一の伽藍を建て密教を安置せ
 んと思ふ若し山中に靈地あれば教へ玉はれと狩人の云
 く我住む山是れなり晝は樹上に瑞氣ありて山谷を照し
 夜は地中に光輝ありて雲漢に到る天地開闢以來凡人の

到らざる靈地なり菩薩彼山に住せよ此犬よく道を知れ
 りと犬を放て隠れ去る是れ高野明神の化現なり大師犬
 に隨ひ絶の川を渡りて天野村まで赴き玉ふ一の藪澤あり
 林樹森々たる中に神社あり一人の神女忽然顯れ大師に
 告玉ふ我を丹生津姫といふ昔し應神天皇よりこの山地
 一万町を以て我に給はる東は丹生川の上をかぎり南は
 横峯を限り西は神勾星河を限り北は吉野川を限とすた
 れ神道に在て佛法の威福を望むこと久し此山地を以て
 菩薩に附属す自在に三寶を安置せよと是れ丹生明神な
 り大師當山開創のとき丹生高野院大明神並に氣比嚴島
 の兩大明神の四社を此所に勸請して當山の鎮守となし
 玉ふ明神の御託宣に云く

春山烟細朝歎一鉢之惟空而廻二百二十伴於都鄙
 秋嶺嵐廟夕悲三衣之漸破而馳三十二王子於遠近云々
 附言 高野山寶性院の宥快法印あるとき悉曇の註釋を
 製作ありしに丹生明神天衣嚴然として御手に魚腦の
 燈籠を持して影向し玉ひ法印に告玉はく汝此山の法
 燈を掲んとす故に我隨喜すと法印の云く我聞く神明
 は光明自在にして黑暗の事なしと今神何を燈をも
 せ玉へると神の玉はく我實に黑暗の障なし然も今燈
 を取れる事は汝此山に在て三密の法燈をか、げ衆生
 の迷暗を照すべきの表示なりとて即和歌を詠じ玉ふに
 曉はまだ遙なり高野山なをもか、げよ法のともしび
 法印感涙にむせひて

高野山曉をまつ身なれともふくるはをしき法の燈
 かくて宥快法印應永廿三年七月十七日定印を結び
 遷化ありしとき頭上に大なる鏡字現れて白色の光
 明室中を照す時に丹生明神彼院に影向し玉ひ空中
 に御聲ありて
 假初の雲隠れとは思へども見へねばをしき山の端の月
 一山王院 御社の前に拜殿あり山王院と稱す毎月朔日に
 は大般若轉讀あり毎月十六日には中曲理趣三昧及び問
 講あり又毎年五月三日には豎精と申して十題五問の大
 會あり豎精の濫觴を案ぶるに應永十三年の頃大明神の
 御託宣には満山の僧侶懈怠なる故に我れ守護の念
 なし不日高間が原に天上せんと是に於てか大衆驚て山

王院に樂り丹誠を凝らして法樂を捧げ奉り明神の擁護を祈る乃ち壽門の長譽と釋迦門院の快全との兩徳を南都興福寺に遊學せしめ維摩會法花會の法事を傳へ歸り應永十四年五月三日山王院に於て宗釋に付て十題五問の豎精を始む豎者長譽精義宥快なり此日微風細雨ありて瑞相庭に滿つ明神御託宣を垂れての玉く大衆我を留むる事至れり盡せり我れ鎮へに守護すべし以來は毎年五月三日豎精のときは瑞雨を降らして神威を示さんと果して今日に至るまで瑞雨の降りそゞは不思議なる哉其他四季の大般若より毎年六月の最勝講等の法會年中たゆる事なし

一 孔雀堂 後鳥羽院の御願本尊は三尺七寸の孔雀明王を

安置す役行者直作の孔雀明王を御腹籠とす長者延果僧正の御作なり先年類焼して嘉永年中堺の河盛仁平氏之を建立せらる

一 一切經藏 昔は美福門院の御願により紺紙金泥の一切經を納められたれども天保年度の火災後之を御影堂の寶藏に秘藏せり現今の輪藏は明治十六年の頃別所榮殿大僧正の一建立にて縮刷藏經を納めたりさて輪藏は支那の傳大士之を發明され衆生をして藏經轉讀の縁を結ばしむるものなり參詣人はこの輪藏をまわして菩提の種をまき玉ふべし

一 杓子の芝 經藏の前に在り昔し明王院の如法上人久安五年四月十日生身のま、白日に兜率天に登り玉ひけるがはき玉ふ所の沓落て明王院後山の松にか、れり之を

沓かけの松と云ふ其時弟子歸從と申すもの上人の跡を慕ふて手に杓子を持ちながら天上せしが暫くありてその杓子を此所に落せし故に杓子の芝とこそ云へ

一大塔の鐘 日本第四番の巨鐘と云ふ弘仁年中大師建立し玉ふ性靈集に梵鐘建立の勸化文あり其後仁平三年に再び鑄造す銅五千九百八十一斤十一兩一分、銀一千九百六十一兩二分を用ひたり次に永正十八年二月十一日燒て天文十六年八月十五日鑄造し次に文化七年燒失して天保四年之を建立すと云ふ

華鐘高架法壇中 製是梵風聲日東 百八緩撞深夜月

三庭曉遠寂寥空

高野山院をまづ鐘の音も幾世の霜に聲ふりぬらん 心圓法師

一勸學院 毎年八月廿一日より十日の間此院に於て學業を試む其義嚴重にして先づ一山の諸法事普請鳴物等堅く禁制せらる新衆は一山の中殊に才器を擇んで二十人を集ひ着座し畢るとき奉行の僧二十箇の圖を以て漸次に列衆にくぼる其圖に當るを以て講師とす昔し本尊圖に依て講せしかとも本尊の總身汗を流し玉ふ故に衆議して爾來獻圖を廢すと云ふ即ち釋論十卷大疏五卷十卷章十卷以上二十五卷を以て毎年一卷を講せ始終暗記して書に向はき文祿年中東照宮御登山ありて大に歎賞し玉ふ此會の濫觴は右大將頼朝卿衆徒の學業獎勵の爲に之を設けられしと云ふ現今は勸學院の初年目二年目は大學林の學科に編入ありて毎年盛大に執行あり

奥院之部

奥院へまゐり侍りて

分け來つる道こそあらめ降る雪も猶深くなる山の奥かな 法印覺基
ふりそふや天津そらなき雨もたい袖の上なる今日の山路に道 遍院
立ならぶ名もしら露のふる跡に傾く石の猶あわれなり 大納言光廣
其他詩歌甚だ多し今之を略す

- 一 一の橋 小田原蓮花谷等を過ぎ盡して將さに奥の院境
内に入らんとする時に橋あり之を一の橋と云ふ此橋を
渡りて十八丁の間右も左も石碑のみ前も後も墳墓のみ實
に世界無雙の靈場と云べし
- 一 多田満仲公の石碑 奥院に數百萬の石碑ありと雖も其

- 一の濫觴を尋ねば多田の満仲公の石碑なりとぞ
- 一 蛇柳 多田公の石碑より半町も行けば道の右側に兩三
株の楊柳あり枝幹ともに屈曲して恰も長蛇の臥せるが
如し一説には悪人この柳を見れば大蛇に變する故に蛇
柳と申すとかや

さく花に錦をりかく高野山柳の糸をたてぬきにして 知

- 一 光秀の碑 石碑瓜裂し梵字傾倒して道の側に傾きたる
は明智光秀の石碑なり主君織田信長を弑したる罪報に
て今に至るまで石碑だも邪曲になるといふ嗚呼臣民た
る者は忠義を重んぜよ光秀の如き逆臣となること勿れ
- 一 中橋 - 奥院に三ヶ所の橋梁ある中の第二橋なり
- 一 棺かけ櫻 承和九年七月十五日に嵯峨太上天皇崩御ま

しますとき御遺詔の旨に任せて御棺を嵯峨野の木の上
 に置き奉るに暫ありて雲漢に入る南山より嵯峨野まで
 五色の雲たなびきて御棺に天童すがりて高野の奥院ま
 で送り此の櫻樹にかけ奉る大師御出定ありて實惠眞然
 等と共に茶毘し奉り御骨を大阪の西の峯に納め玉ふといふ
 一汗かき地藏 棺かけ櫻の東に小堂あり地藏尊を安置す
 毎朝玉の如き汗を流し玉ふ故に此名あり毎日晨朝入諸
 定入諸地獄令離苦無佛世界度衆生今世後世能引導の御
 誓により大悲代受苦の爲に汗珠を流し玉ふとかや
 一姿見の井 汗かき地藏堂の東に一の井戸あり玉水澄徹
 して鏡の如し案内者は参詣人をして其姿を見せしむ若
 し姿うつらぬ時は三年の内に災難ありと云、この井を一

名は薬井と云ふ延喜の勅使少納言惟扶朝臣常に一病あ
 るを歎て大師に祈請ありけるに夢中に告玉ふ是れ業病
 なり世醫の治する所に非む當山の大阪にある靈水を飲
 むべしと維扶大に歡び彼水を服するに重病速に平癒せりとぞ
 一一番石碑 道の北側壹丁奥に在り高さは二丈八尺臺坐
 は八疊敷の石塔にして是れ高野山中第一番即ち駿河大
 納言の石塔なり

一芭蕉塚 昔し芭蕉翁奥院に詣で亡父母を思ひだし涙を
 まばり 父母の頼りに戀し雉子の聲 ば せ を
 と詠じたりしを太雅之を石に刻んで此所に立たり
 一圓光大師の碑 芭蕉塚より一丁も行けば石欄干の中に

五輪の寶塔あり是れ法然上人の墓所なる故に殊に淨土宗の人は懇ろに參詣せらるべし

一 御供所 大師御入定の後實惠真然等の六人の御弟子御廟前に於て供花焼香等を爲し勤仕し玉ふ所なり今に高野山住職分は輪番に常詰して大師の御供物を調進しつゝあり又奥の院に御膳を供養する人は此所に物を納めて依頼すべし且爰に納經所ある故に參詣人は御判を願ふべし納經場の正面に極めて古き阿界の曼荼羅あり弘法大師の御直筆なる故に恭しく拜覽せよ次の間に弘法大師御作の大黒天あり昔し大師自ら開眼して御厨子の内に安置し鍵なき錠を加へ玉ふ故に今に至るまで開扉する事なし夫れ大黒天は財寶の福主なれば一天榮耀四

海豐樂當山繁昌富貴自在の事を長く此尊に頼み置かれしなり

一 水手向所 玉川のはどりに六体の地藏尊あり總て銅像なりこの地藏尊の前に於て先祖代々菩提の塔婆を立て、水手向をなす但し塔婆はその所縁坊より受け來るべし

一 玉川 奥院の閑林を繞れる一帶の清流あり是れ歌學集に傳ふる日本六玉川の隨一なり大師の歌に

忘れても汲やしつらん旅人の高野の奥の玉川の水
 古人の歌に

しきみ摘むたが衣手の雫より流そめけん玉川の水
 雲石堂の詩に

寒玉幽溪傍二路遊 雲根繞出夕陽前 聞名不汲旅人手
 百世猶傳一首篇

附言 玉川に焼魚といふ一種の魚あり俗に云ふ弘法
 大師さる所にて漁父が魚を串さしにて焼きけるを強
 て購ひ歸りて之を玉川に放つに魚は忽ちよみかへり圍々
 焉として水に入る今に至るまで魚の背にくしあどあり
 一御廟橋 玉川の上に架したるを御廟の橋と云ふ是れ奥
 院第三橋なり此橋の板敷三十七枚ありて金剛界三十七
 尊の梵字を書きたり即ち此橋を渡るは三十七尊の三味
 に結縁するものなり悪人罪人は渡るとを得せして歸る
 もの往々あり一條院の治安三年十月十七日御登山せら
 れたる法成寺入道大相國道長公の歌
 これやこの音に高野の橋ならん聞わたりしに違はざりけり
 この橋より以内は諸佛菩薩集會し神祇冥道充滿し玉ふ

とて昔し明遍上人は此橋より遙拜して歸りしと云ふ又
 延喜年中觀賢僧正大師を拜して歸るとき大師出定して
 此橋まで送らせ玉ひぬ僧正恐れて辭し申されしに大師
 の云く我は汝が本有の佛性を送れり唯汝のみに非せ末
 世の道俗一念の信ありて我前に參詣する者は近は此所
 に送り遠は淨土に送らんとの玉へり
 一彌勒石 御廟の橋を渡りて道の左側に小奇麗なる御堂
 あり中に彌勒石と申すものあり一説には大師都率天よ
 り蓮の糸を以て釣をろさせ玉ふと云ふ
 一御陵 石楠の仙葩は瑞籬の内外に咲き亂れ玉川の清流
 は聖墳の東南に流れ遶りいとも閑雅なる處は天皇陛下
 御歴代の御陵なり參詣の徒は必を拜崇致さるべし

一燈籠堂 東西十八間南北七間三尺五寸の建築なり俗に
 貧の一燈長者の万燈と申すなり抑もこの万燈籠は大師
 御在世のとき興行し玉ふその經文に云く
 聊設万燈万華之會供養而部大曼荼羅聖衆奉答四恩
 虛空盡衆生盡涅槃盡我願盡藍宇一炎乍飄法界降病
 質多万華含笑諸尊開眼云々
 如是深き誓ひの万燈なれば一度この光明に照されん人
 は再び三途の黑暗に歸らぬ大日彌陀の光明に攝取せら
 れて淨土往生の縁となるべし大師御入定後万燈籠中絶
 せんとせしとき和州の祈親上人大師願を發して之を再興せ
 られければ高野明神悦はせ玉ひ上人に和歌を示し玉ふ
 我あらばよも消はてし高野山たかきみのりの法の燈

今燈籠堂の中央に一の大燈をか、けて持經燈籠と號す
 るは祈親上人に供養する燈明なり中壇の舍利塔は後高
 倉院より大師に捧玉ふ所なり寛治二年白河院御幸のとき三万燈
 を獻せられ徳川家康公も數多の燈油料を寄附せらる現
 今も供養する時は難有法事あり手順は所縁坊にて問ふべし
 續千載集 性助
 消ぬべし法の燈か、けても高野の山のあくるをぞ待
 新六帖 知家
 高野山あけんひかりを待人の長き夜をへぬ法の燈
 新葉集 如願
 高野山曉遠く松の戸に光りを残すのりのもしび
 僧正宥匡和上の歌に

ふくるよもあかつきまではか、ぐべし高野の山の法の燈
毎年舊三月廿一日には此堂にて正御影供と申す大法會
あり五畿内を始め諸國の群參人山を築きてその盛大な
る事筆紙の及ぶ所に非也

一 骨堂 奥院御廟の左側に八角寶形の堂あり是れ日本諸人の納骨
堂なり今の堂は播州姫路松下河内守元綱朝臣の建立なり大師の
云く我山に納むる諸人の遺骨我三密加持力を以て極樂世界又は
兜率の淨土に往生せしめ菩薩の位を得て當來には必き慈尊說法
の聽衆となすべしとされれば當山に骨を納めば眞言不思議の法力
と靈地殊勝の功德力と大師金剛の定力との三力加持に
よる故に亡魂の得脱疑あるべからず

高野山をろす嵐のはげしともこの葉は残れ後の世までも 室町日記

高野山峯の嵐の烈しさに生葉落すも後の世の爲め 熊阪長範
御廟の左側には丹生高野兩大明神の社あり社の側に經
藏あり本尊は文珠菩薩石田治部少輔三成公悲母菩提の
爲に高麗本は一切經を奉納せり經藏の前に看經所あり
衆徒看經の所なり看經所の下に闕伽井あり大師自ら掘
られて無熱池の水を入れ玉ひ御直筆を以て龍寶藏と云
ふ銘を井の蓋に書せ玉ふと云へり
一 奥院の御廟 仁明天皇の承和二年三月廿一日寅の一点
に到て大師奄然として金剛の大定に入り玉ふ御年六十
二 法藤四十一なり嗚呼悲哉悲母すて、去れり嬰兒誰れ
か育せん、釋尊涅槃の夕は漏盡の羅漢すらなを離別の胸
を焦す況んや末世迷倒の凡夫豈に此の苦に堪へんや行

法の床僅に留りて殘月獨り住めり觀念の窓永く閉ぢて
 松風空しく拂ふ同廿五日仁明天王勅使を以て賻を賜ひ
 廢朝し玉ふこと三日なり後の太上天皇淳和院使を以て用書を賜ふ
 眞言洪匠密教宗師邦家憑其護持勳植荷其德惠豈圖峻
 未迫無常遽侵仁舟廢棹弱喪失歸嗚呼哀哉禪關僻在離問
 晚傳不能使奔赴相助茶毘言之爲恨恨何已思付舊窟
 悲涼可斷令音遙寄草書弔之者錄弟子而慰入室桑門悽愴
 奈何兼以達旨

哭海上人

太上天王

得道高僧氷玉清 乘杯飛錫度滄溟 化身住世何能久
 塵界定留惠遠名 緇侶古來以爲樂 凡夫徒自感傷情
 遺草能誇王坦駿 舊章寧謝馬長卿 蓮宮猶擊羅浮磬

香閣無翻貝葉經 歲晚禪林搖落盡 涼天皎月照墳局
 從此津梁長已矣 魂何處救蒼生
 即ち實惠眞雅眞濟眞如親玉等の御弟子自ら御輿を荷ひ
 奥院に移し轉軸楊柳摩尼の三山の中に姑射山に對して
 石窟を設け恭しく定身を安置し上に廟堂を建立し御入
 定の御廟と申すなり御廟前の前後には万年草とて眞青
 の靈艸滋りて瑠璃の莊嚴を粧へり古老の傳には此草を
 以て吉凶を占ふに神驗ありと云ふ

贈官諡號の事

文德天皇天安元年大僧正の極官を贈らせ玉ふ宣命に云く
 故大僧都空海大法師は眞濟の師なり若れば延暦年中
 海を渡りて法を求む三密の教門此よりして發揮す諸宗

の中功譽二なし仍て今大僧正官を贈玉ひ治め玉ふ
次に清和天皇貞観六年三月廿七日に法印大和尚位を贈
らるその勅書に云く

右可贈法印大和尚位

傳燈大法師位空海
勅すらく智慧の峯高く菩提の月朗なり三密の法印は
四輩の儀形たり人亡して道盛なり世舊りて名あらた
なり維れ景暴の甚深きなり追崇して何ぞ止まん肆

贈龍章式寶幽魄可依前件主者施行せよ

次に人王六十代醍醐天王は大師を信仰し玉ふ甚だ深し
或は東寺にて御影供を修すべき旨を宣下し玉ひ或は大
師御製作の書を大藏經の中に納むべき旨を勅詔し玉ひ
延喜十八年寛平法王より御奏聞ありて大師の謚號を請

はせ玉ふ觀賢僧正も同じく其事を奏せられける然るに

廿一年十月廿一日の夜大師天皇の御夢に入て御衣を賜

はん事を乞ひ和歌を詠じ玉ふ

高野山ひすふ菴に袖くちて昔の下にぞ有明の月

天王驚かせ玉ひ則ち赭色の法衣を調へ同年十月廿七日

勅使小納言平惟扶廟使殿若寺僧正觀賢を以て弘法大師

の號を南山の廟前に贈り給ふ詔に云く

琴絃已絶遺音更清、蘭叢雖凋餘香猶播、故贈大僧正

法印大和尚位空海、消疲煩惱抛却驕貪、全三十七品

之修行、斷九十六種之邪見、既而佛日西沒渡浪海而

仰餘暉、法水東流通龍谷而導清浪、受密語者多滿山

林、習眞趣者自成淵藪、况太上法皇既味其道追念其

人、寔雖泛天之波濤、豈忘積石之源本、宜加崇艷之曲、
謚號弘法大師

大師は定中より答禮をのぶ

我昔值薩埵 親悉傳印明 起無比誓願 倍邊地異域

晝夜愍萬民 住普賢悲願 肉身証三昧 待慈氏下生

次に觀賢僧正御廟の扉を開かれけるに、廟中すべて霧の

如く隔りて尊容を拜すること能は老僧正至心に祈請せ

られしかば、雲霧漸くに晴れて、滿月の出るが如く尊容の

顯れ玉へるぞかたじけなき僧正歡喜の袂をまぼりて、弟

子石山の内供淳祐は、まだ童形にて具せられけるを近く

招て拜せしむるに、霧深く隔て尊容を見、唯異香の室中

に薫むるを知るのみなり、僧正餘りの詮方なさに淳祐の

手を取て大師の御膝に觸れしむるに、猶尊容を見たてま

つらむと雖も、手の觸る所は柔軟にして温なること、言

語に述べべからむ、其指に薫むる所の異香、一生失せせし

て所持の聖教にうつりければ、香の聖教とて、今も石山寺

の靈寶なりとぞかくて、御髮を剃り奉り、勅賜の御衣を着

せまいらせ、廟門を鎖して都に歸り、詳に奏聞せられけれ

ば、天王限なく感じ玉ひ、今後恒例として、毎年三月新衣を

供養すべき旨宣下し玉ふ、以來今に至るまで、年々御衣供

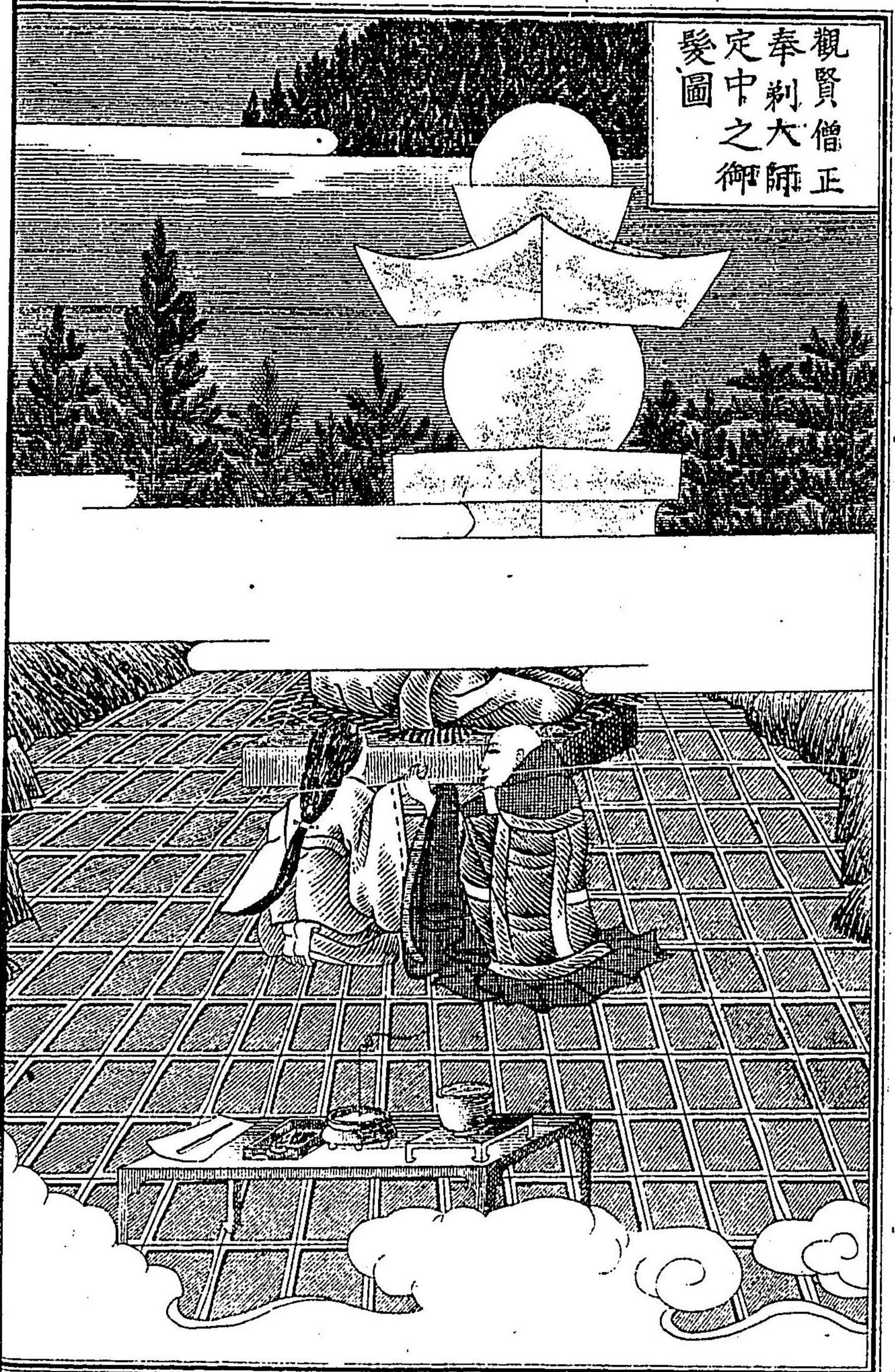
養し奉る參詣の人に授與せらる、はこの御衣なり

一、三寶鳥の事、御廟の閑林にて、後夜頃になれば、三寶鳥のな

くあり、その聲、佛法僧と聞ゆる故に、此名あり、大師の詩に

閑林獨坐草堂曉 三寶之聲聞一鳥 一鳥有聲人有心

觀賢僧正
奉判大師
定中之御
髮圖



聲心雲水俱了々

後鳥羽帝御製

我國はのりいかめしき所にて鳥も佛法僧とこそなけ

豊太閤の詠

傳へこし鳥もみのりを行ひの聲は高野に有明の月

頓阿法師の詠

なをしらぬ深山の鳥の聲はして逢人もなし植の下道

其他靈鳥の事、姑射山仙境の事、三山の靈場等枚舉に

違わらむ今は之を略す

大門口の下り道

一 大門 高野山西口の大樓門なり棟は南北に横はり扉は
東西に開けたり二階造り十五間に十四間の大樓門にし

て百二十餘坪あり二層の屋根には赤銅を瓦として高く
 雲衝に聳へたり遠く望めは南海を眼前に盡し近く顧み
 ば喬木を脚下に踏み壯觀の至なり是れ大師開山最初の
 建立にして保延年中座主定海のとき再建せらる左右の
 大金剛力士は大佛師法橋運長の作なり
 附言 大門の傍に御長一丈六尺の觀音の銅像あり明和
 九年壬辰東都大火のとき燔死せし群靈追悼の爲に建立
 せしと云ふ
 一 鏡石 五十丁の阪を下る道筋に鏡石と申す石あり光明
 温順にして人影を寫すこと明鏡に似たり不空三藏の梵
 天擇地法に云く山の高頂に登て大石の清きこと磨する
 が如く人影の現るを見ん是石は聖人吉祥の石なり白

茅を以て坐とし石の乾隅にて眞言を誦せば必悉地を
 得べしと又楊雄が蜀都記にも石鏡一枚を以て其墓を表
 す云々然れば靈山には往々鏡石あるか
 一 押上岩 大師の御母阿刀の玉依姫は我子の住む山へ登
 らんとて此所まで來るや雲雨雷鳴せりその時大師下り
 來て大磐石を押し上げ御母をして雷雨を避けしむ故に押
 上岩と云ふ今猶大師の御手跡のこれり不動阪の四寸岩
 には足跡を留め五十丁の押上岩には手痕を存せ三池大
 聖の神力不可思議なり
 一 袈裟掛石 高祖大師が御袈裟を掛られたる石なり
 一 捻石 大師の御母は女人の結界を恨みて此石を捻ちま
 わしたりとぞ石の腹に天然の穴あり參詣人は其穴をく

いりぬけて吾れ生死解脱の縁ありと申すとかや
 一天野神社 五十丁を下れば矢立村なりこの村を距るこ
 と二里はかりにして天野村あり前の壇上の部に記し置
 きたる天野の丹生明神とは此所なり
 一慈尊院 天野より天峰山を超へて二里半も行けは慈尊
 院と申して弘法大師御母公の御廟所あり大師御在世の
 とき雪降らは降れ風吹かは吹け日々此所まで通はれて
 定省の孝養を盡され御母も八十餘の御高齡にて終焉を
 示し玉ひ大師御引導の力にて都率の内院に往生成佛な
 し玉ふとそ故に大師の母を彌勒尊と習ふなり俗に云ふ
 女人の高野とは此所なり

高野山道とるべ終

明治廿五年四月廿五日印刷
 明治廿五年四月廿六日出版
 五五

定價金拾貳錢

編輯者 兼
 發行者

和歌山縣士族

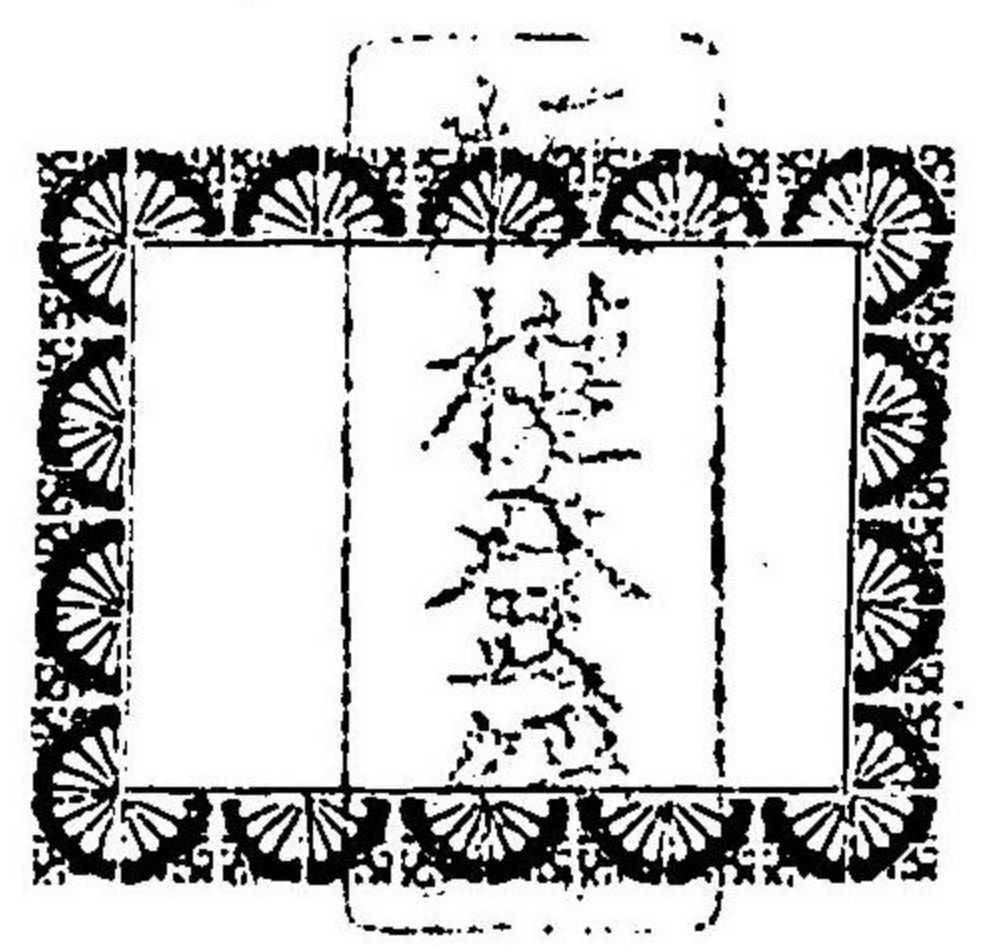
山口小五郎

和歌山縣紀伊國伊都郡九度山
 村大字九度山二百三十一番地

大阪府平民

喜田甚太郎

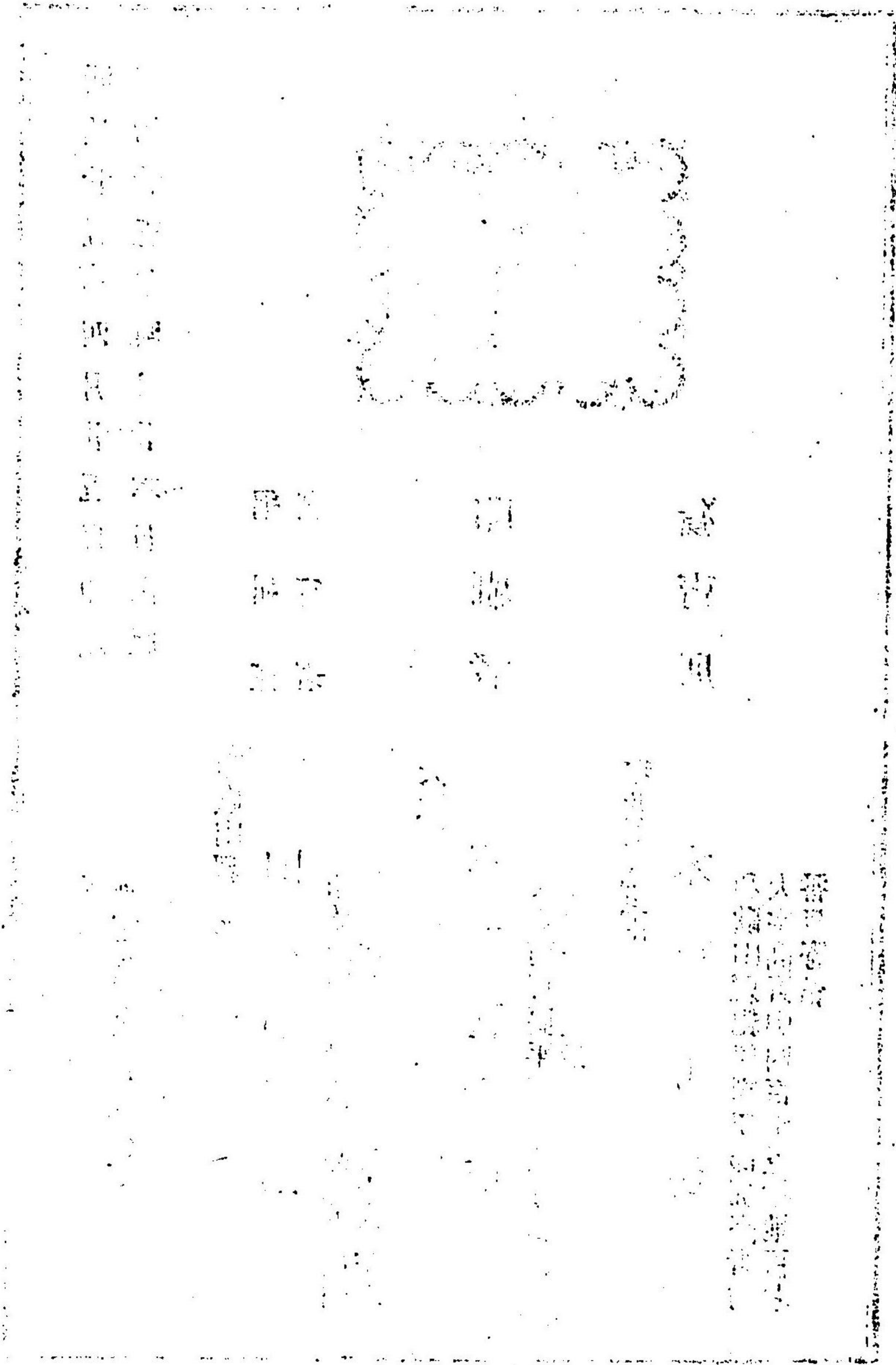
大阪市東區平野町四丁目
 九十一番屋敷



發賣所

木村市松

和歌山縣紀伊國伊都郡高野村
 大字高野山四百十五番地百七
 番戸寄留

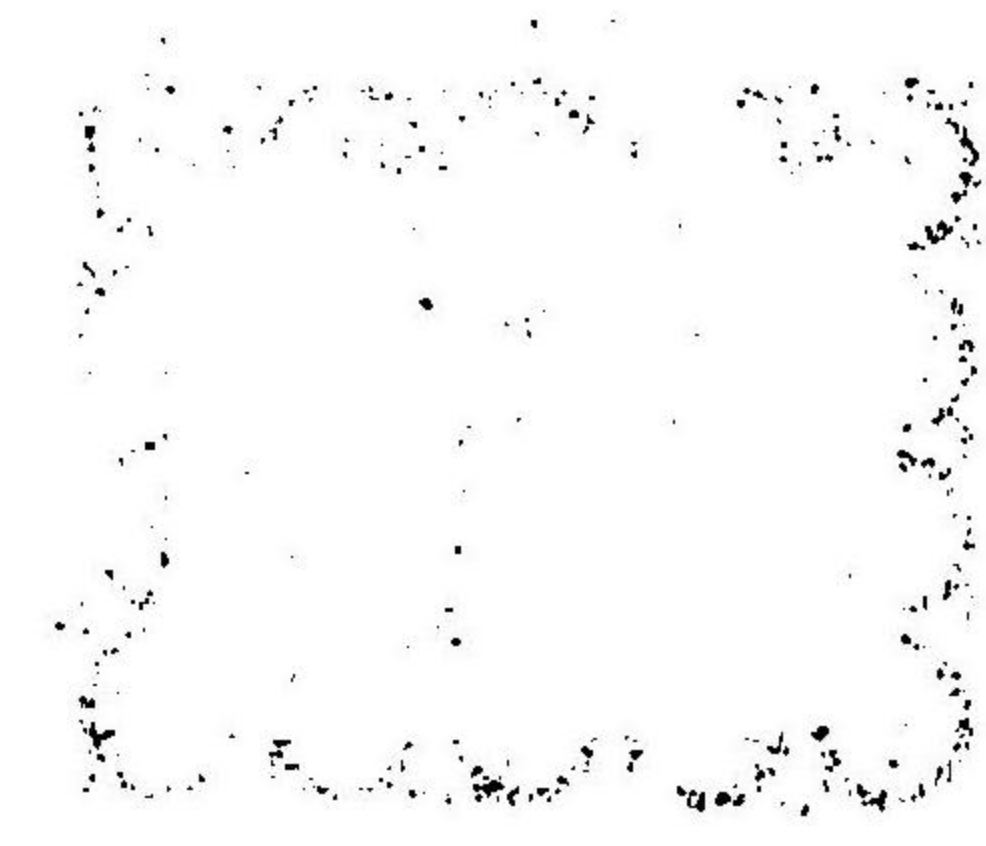


Vertical column of faint text on the left side of the frame.

Vertical column of faint text in the middle-left of the frame.

Vertical column of faint text in the middle-right of the frame.

Vertical column of faint text on the right side of the frame.



Vertical column of faint text at the bottom right of the frame.

Vertical column of faint text at the bottom left of the frame.

Vertical column of faint text in the lower middle-left of the frame.

Vertical column of faint text in the lower middle-right of the frame.

Vertical column of faint text in the lower right of the frame.

ex 467

9
5

025431-000-6

特29-535

高野山道しるべ

山口 小五郎 / 編

M25

ADC-2881



特

5